

嵯峨八景大和絵屏風に

貝原益軒の「嵯峨八景」をもとに10年がかりで創作された大和絵の屏風
(京都市西京区嵐山・ギャラリーあーとすぺーす)



嵯峨芸大卒業生ら
10年かけ完成

「広沢秋月」「小倉紅楓」… 嵐山で展示

で展示している。時代考証を行い平安時代の風俗や装束を再現、「蛾野春草」などの言葉から、当時の景観をイメージして創作している。

嵯峨八景は「蛾野春草」「亀峰緑樹」「野宮松風」「広沢秋月」「小倉紅楓」「清涼晚鐘」「石嶺積雪」「洪川水鳥」の八景。四曲一対の屏風(高さ1.33メートル)の合計八つの画面に、八景を描き込んだ。基底材の絹は茶で染めて落ち着いた雰囲気を出し、岩の具や金泥などで色を付けた。若菜摘みや船遊び、鷹狩りを榮しむ貴族や、田植えをする庶民の暮らし、当時の植生なども調べて描き込んだ。

京都嵯峨八景研究会は、2001年に京都嵯峨芸術大(右京区)

の学生たちで立ち上げた「京都研究会」が前身。メンバーが卒業した後も、嵯峨八景研究会として屏風の制作作業を続けてきた。大和絵の技法を学ぶため、神護寺の「山水屏風」や冷泉家の「月次図屏風」などを見学して研究したという。

研究会の山本真由美

(山田修裕)

代表(27)は「嵯峨野の空間の雰囲気を感じてもらえるような構図にしたい」と話している。10日まで。午前11時～午後6時(木曜休み、10日は午後4時まで)。問い合わせはあーとすぺーす ☎075-8822-4868。

江戸時代の儒学者貝原益軒(1630～1714年)が京都を訪れた際に選んだとされる「京都嵯峨八景研究会」が、10年がかりで完成させ、10日まで京都市西京区嵐山のギャラリー「あーとすぺーす」で展示している。絵の技法で屏風に表現しようと試みていた